

がん腫	消化器癌 大腸					
レジメン	SIR					
レジメン内容	用量	点滴時間	Day1	8	14	
S-1	40-60mg/m <sup>2</sup> *2	経口 2投1休	○	…	○	
IRI	150mg/m <sup>2</sup>	90分	↓			
<b>1 クールの期間</b>	<b>3 週間</b>					

※《新規》注射 未実施 消化器 医師名なし

- Rp01 2017/02/20 ~ 2017/02/20 毎日-(1)
  - メイン点滴 末梢①
  - 点滴(メイン、自然滴下)
  - ルートキープ
  - 大塚糖液 5%250ml 1 本
- Rp02 2017/02/20 ~ 2017/02/20 毎日-(1)
  - メイン点滴 末梢①
  - 点滴(メイン、自然滴下)
  - 15分かけて注入
  - 生食 100ml 1 本
  - アロキシ静注0.75mg/5ml 1 瓶
  - デキサート注射液6.6mg 2mL 9.9 mg
- Rp03 2017/02/20 ~ 2017/02/20 毎日-(1)
  - SIR(S-1; 2投1休)
  - 側管点滴 末梢①
  - 点滴(側管、自然滴下)
  - 90分かけて注入
  - 大塚糖液 5%250ml 1 本
  - [イリテカン塩酸塩点滴静注液100mg「タイホウ」5mL★](#) 1 mg
  - [イリテカン塩酸塩点滴静注液40mg「タイホウ」2mL★](#) 1 mg

レジメンについて IRIS の変法。IRIS が 4 週 1 コースであるのに対し、SIR は 3 週 1 コース。  
IRI の用量は IRIS が 125mg/m<sup>2</sup>であるのに対し、本療法では 150mg/m<sup>2</sup>となる。

主なエビデンス Annals of Oncology 17 ; 968-973 , 2006

開始・減量基準 減量は I-OHP 130 → 100 → 75mg/m<sup>2</sup>、S-1 60 → 50 → 40mg/回 (最低 40mg/回)

TS-1

Ccr ≥ 80 初回基準量

60 ≤ < 80 初回基準量 (必要に応じて 1 段階減量)

30 ≤ < 60 原則として 1 段階以上の減量 (30~40 未満は 2 段階減量が望ましい、最低 40mg/回)

Ccr < 30 投与不可

I-OHP は、Ccr > 20 であれば、減量の必要なし

<p>主な副作用（％）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 好中球減少減少 本邦の報告では 45.6%の症例で好中球減少を認めている。Grade3 以上の好中球減少が出現した場合は、休薬にて Grade2 以下まで回復を待ち、次コース以降の急速静注 5-FU の休薬や L-OHP の減量を検討する。</li> <li>✓ 末梢性感覚ニューロパチー L-OHPの蓄積性毒性であり、総投与量 680mg/m<sup>2</sup> において Grade3以上が4%にみられる。治療には pregabalin、duloxetine などが使用されるが効果は証明されておらず、牛車腎気丸や Ca/Mg 製剤は臨床試験にて効果が否定されている（牛車腎気丸の有効性については諸説あり）。治療が難しいため、Grade2の時点で L-OHP を休薬し、Grade1 以下に回復するまで投与しない等の予防的対応が重要である。</li> <li>✓ アレルギー反応 全経過の 2～18%にみられ、L-OHP 投与開始後数サイクルで発症することが多い。アナフィラキシー様の症状が出現するため、L-OHP の投与を直ちに中止し、抗ヒスタミン薬・ステロイド・必要に応じて adrenaline を使用する。次回以降の L-OHP 投与は中止するか、抗アレルギー薬の前投薬のもとで慎重に行う。</li> </ul>
<p>当院レジメンについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ イリノテカン MEC であるため、dexamethasone は 9.9mg、セロトニン拮抗薬は palonosetron とした。</li> <li>✓ オーダ内容としては IRIS とほぼ同じだが、薬剤部でレジメンを把握する目的でレジメン名をコメント入力。</li> </ul>
<p>患者への注意事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 血管外漏出の徴候または症状出現時には伝えること</li> <li>✓ 下痢の際には脱水を避けるため水分補給が重要</li> </ul>
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ がん薬物療法ガイド P126 編集 国立がん研究センター 内科レジデント・薬剤部レジデント （医学書院）</li> <li>✓ エビデンスに基づいた癌化学療法ハンドブック 2017 編集 国立がん研究センター東病院 病院長 大津 敦 （メディカルビュー社）</li> </ul>